

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育

「ものづくりを通して自分をつくる」「夢を創造する」おといねっぶ美術工芸高校が生徒に発するメッセージは、「探す」「見つける」ではなく「つくる」。北海道北部の寮制高校での3年間、生徒たちはどのように自分をつくっていくのか。また、教員や地域はどのように支援しているのでしょうか。在校生、卒業生、教員、村職員に取材しました。



美術を通して自分に 工芸を通して社会に 向き合う村立高校

第29回 おといねっぶ美術工芸高校
(北海道・村立)

取材・文／江森真矢子

北海道で一番小さな村、音威子府（おといねっぶ）。軽やかな響きの地名は、川の姿を表すアイヌ語に由来するといふ。中央をゆったりと流れる天塩川とその支流沿いに集落が点在する村の人口は、令和に入り700人を切った。その村がまちづくりの基幹と位置づけるのが村立おといねっぶ美術工芸高校だ。

今年度、生徒数は110人、教職員は27人。村の5人に1人は高校関係者という計算になる。生徒のうち21人は北海道外出身で、道内出身の生徒を含め全員が寮生活を送っている。

村立、工芸科、全国募集、寮、と珍しいことづくめだが、その内実を知れば、探究的なカリキュラム作りや地域と共に生徒を育てるためのヒントが見えてくるのではないだろうか。

ものづくりを通して 自分をつくる

「初めて来たとき印象に残ったのは、余るほどある自然です」と言うのは、東京出身の3年生、佐野雄亮（ゆうすけ）さん。幼少時から絵を描くのが好きだった佐野さんに同校を薦めたのは北海道に住む祖父。学校見学で先輩の作品を見て、こんな絵を描けるようになりたいと受験を決めた。半年後に卒業を控えた佐野さんは今、「音威子府でしかできないことが詰まっています」と振り返る。幅広く美術を学べたこと、寮生活、大自然の中での散歩、全校で参加する村民運動会、たくさんの大人と触れ合う機会があったこと。「来

てよかったとおいちゃんに感謝しています」と振り返る。

同校の授業の入学者選考に実技はない。美術、工芸のいずれのコースを希望するかも尋ねない。入学すると美術・工芸の基本技術を身につけ、楽しさを味わう授業から「ものづくりを通して自分をつくる」3年間が始まる。

カリキュラムの大きな流れは1年を基礎を学び、2年で美術か工芸のコースを選択し、3年は卒業制作に取り組みむというもの。佐々木雅治教頭は「授業を通して技術や考える力がつくだけでなく、寮生活や村の人の関わりのなかで、人間として総合的に成長する環境がある高校です。人に対して優しいのもうちの生徒の特徴で、3年間で誰に対しても大人の対応ができるようになることを実感しています」と言う。

「みんなバラバラ」 作品に表れる個性

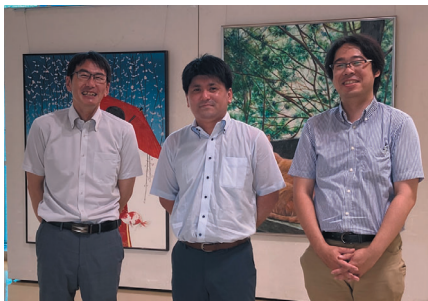
3年間のカリキュラムをもう少し詳しく見ていこう。まずは1年。工芸では村から支給される鑿（のみ）や鉋（かんな）など工具類の手入れを習い、おもちゃやカトラリーといった小さなもの

を作りながら技術を身につける。また、大学教員から木や森について学ぶ授業は村内の北海道大学中川研究林で行われる。美術は、デッサンなど平面作品が中心。頭の中にあるものを形にする術を磨きながら、自分に向いているのはどちらかを考えていく。

2年でコースに分かれると、工芸では機械を使うようになり、美術ではさまざまな手法を学ぶが、いずれも与えられた課題の中でコンセプトを立て、制作をする流れは共通している。工芸科長の角南（すなみ）友繁先生曰く「生徒は美術を通して自分を知り、工芸では使うものも考えます。創作アウトプットがあるから自分の得意不得意、やりたいことが見えやすく、各コースでさらに深めていきます」。

佐野さんは「おと高生は個性豊か。作品には人間性がすごく出るんですが、みんなバラバラで、同じような絵を描く人がいません」と言う。美術で自分と、工芸で他者や社会と向き合い、創作を通して自分らしさを育てていくのが、同校のキャリア教育だ。

3年ではよいよ卒業制作、工芸では小さなスケールで試作を繰り返して



(左から)佐々木雅治教頭、角南友繁先生(工芸科長)、横山貴志さん(音威子府村総務課地域振興室)



川崎 映さん(砂澤ビッキ記念館学芸員)



佐野雄亮さん(3年生)

から取り掛かる。「初めて一から自分で設計するので、どの木を使うのか、大きさ、丈夫さ、段取りなど考えることがたくさんありますし、自分がどこまでできるのか見極める必要もあります。1年間のなかで生徒は変化するので、美術では途中で描きたいものが変わったり、複数の作品を創る生徒も。生徒によって時期は違うのですが、やりたいことが見えたときにぐっと成長するように思います」と角南先生。

制作とともに取り組むのがポートフォリオ作り。なぜこの作品を創ったのか、どんな探究の過程を経たのか、写真入りでまとめたものは校内に加え札幌、旭川で行われる作品展でも展示。1月に行われる卒業制作発表では、作品のプレゼンテーションを行い、その後に交流会も設けている。対話が、作品と創作をした自分自身についての気づき、

達成感をもたらすから「交流会が大事なんです」と佐々木教頭は言う。

家具、食器、おもちゃ、楽器や木彫、水彩、アクリル、色鉛筆画。多彩な卒業制作作品は、卒業後も1年間は校内で展示され後輩たちの目標となる。バラバラな他者の表現を認め、自分の人間性の表れた表現が認められる環境も、生徒の優しさや個性を育てる要素なのではないだろうか。

高校は村の基幹 卒業後も支援は続く

「先生たちが自分のやりたいことを信じてくれた。自由に創りたいものを創ることができた3年間でした」。卒業生の川崎映(えい)さんは、高校時代をそう振り返る。札幌出身の川崎さんは2010年に卒業後、大学で美術を学び、今は村営の砂澤ビッキ記念館で学芸員として働いている。高校の3年間で、ボランティアとして通ったこの場所が好きで、求人を知って帰ってきたのだ。近年、川崎さんのように村に戻ってくる卒業生が徐々に増えつつあり、村も支援を始めている。

一例がアーティストインレジデンス事業。村で創作するために宿舎と制作場所を提供するもので、参加した卒業生が後輩たちと交流する機会も設けた。また、昨年は音威子府駅の空きスペースを村民、高校生、卒業生の使えるギャラリーに改装した。仕掛け人である村地域振興室の横山貴志さんは「高校生は巣立っていくもの。残ってほしいと考えているわけではありません。でも村が好きと言ってくれているのに何もしないのは寂しいですね。教育に関しては全部先生方にお任せしてきましたが、もう少し村としてできることはな

いか模索しています」と言う。

同校が工芸科、村営移管に向けて舵を切ったのは昭和50年代。北海道で入学者20人以下が3年続いたら他校と統合していた時代に「廃校はコミュニティの崩壊につながる」と危機感を抱いた当時の校長、狩野剛氏が動いたことから始まった。村の資源である木に注目し、付加価値を高める可能性のある工芸科目を導入。近くに一流の専門家がおり、と彫刻家の砂澤ビッキ氏に創作の場を用意し、村に招くこともした。

以来40年、厳しい時代も続いたが、村と二人三脚で学びの場を守り、今では全国から生徒が集まる学校になった。高校が村を動かし、村が高校を支えてきた音威子府。未来を創造するのは、一から何かを創る力をつけた高校生や卒業生かもしれない。

授業



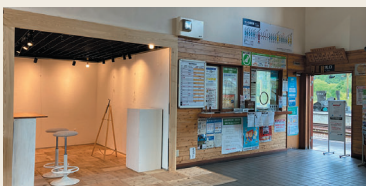
ふんだんに用意された木材や工具類、作業着も村から支給されたもの。工具箱は入学前の課題として各生徒が作る

卒業制作



(上)廊下や階段、至る所に生徒の作品が置かれており展示後は、生徒の自宅に送られる(左)成長の軌跡が綴られたポートフォリオ

音威子府村との関わり



(上)駅舎のギャラリーでは生徒の企画展が開催され、村民との交流機会に(右)全生徒が参加する村民運動会。賞品の洗剤など日用品が生徒に喜ばれている



School Data

1950年創立/工芸科/生徒数:110人(男子39人・女子71人)/進路状況(2020年度実績)大学11人・短大2人・専修16人・就職3人・その他2人